

まかい
おうじょ

魔界王女

白銀のロゼッタ

立ち読み版

序	白銀の魔神	006
第一話	善なる魔神	021
第二話	復活の魔神	049
第三話	囚われの魔神	066
第四話	散る魔神	097
第五話	堕ちゆく魔神	136
第六話	すべてに裏切られし魔神	224
最終話	淫欲の魔神	254

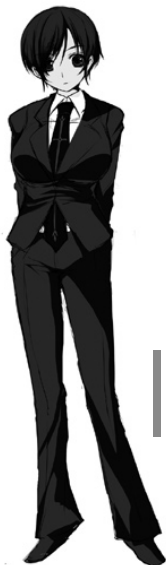
登場人物紹介

Characters



ロゼッタ＝リディア＝
ユール＝ラケイム

髪の色や衣装の色など、全身白づくめの魔神。現在は正義感が強い性格だが、百年程前はかなり残忍な存在であり、“銀血のロゼッタ”と呼ばれていた。



しとう あきら
紫藤 晶

ロゼッタに力を貸す転生六家・バレンタイン家の使用人。密かにフィリオに思いを寄せている。



フィリオ＝バレンタイン

バレンタイン家の当主で、生まれた頃からロゼッタの魔力を与えられ続けているため、魔神にも匹敵する力を持つ。

キース＝バレンタイン

かつてロゼッタを救ったバレンタイン家の男。ボロミオンの攻撃からロゼッタを守るが、最終的には殺されてしまう。

ボロミオン＝リバース

かつてロゼッタを追いつめたリバース家の魔神。バレンタイン家の地下に封印されている。

アレイア＝ミール＝ソレイユ

六名家ソレイユ・家の当主。ボロミオンを復活させて力を奪おうと画策する。

ファルシア＝メルル＝

カナール＝レリアリア

六名家・レリアリア家の当主で、自称・最強の魔神。自尊心が非常に高い。

やぎりとう こ

夜霧東子

ファルシアのサポート役。心優しく朗らかな性格。

「彼の命と引き替えに、僕に逆らえないよう魔力枷を受けてもらう……」

フィリオという人質だけでは何時^{いつ}ロゼッタが裏切るか分からない。

（その為の魔力枷というワケか……）

口惜^{くや}しげにロゼッタは奥歯を噛むが、何故かボロミオンは残念そうな表情を浮かべて首を横に振った。

「けどね、残念ながらそれはできない。君に対して魔力枷を発動させようにも、僕が僕を邪魔するからだ」

「僕……？ キースか……」

最期の残り香のような力が、ボロミオンによるロゼッタへの力の行使を阻害しているらしい。最悪な状況だというのに、白銀魔神の口元には少しだけ笑みが浮かぶ。

（あいつらしいな……）

彼のお人好しな表情が脳裏をよぎった。

「そういうこと。困った話さ。恐らく、彼が持つ君への想いが、僕の力を鈍らせているんだろうな……」

やれやれと敵は肩を竦めた。

「けどね、僕は君を諦められない。力づくでも君を僕のものにする。君が僕に決して逆らわない、絶対に君が僕を裏切らなくなるようにね。彼はそれまでの……保険みたいなものさ」

逆らえばフィリオを殺す——という宣言と受け取っていいだろう。

「……私が貴様に屈するなど有り得ない」

フィリオが死ぬかもしれない。想像するだけで冷たいものが背筋を走ったが、白銀魔神は決して引くことなく敵を見据えた。

「やはり君は誇り高い……。益々君が欲しくなったよ。その自信……。一体いつまで保つかな？ ふふ、まず手始めに……。君に自分の立場というものを教えてあげるよ」

言葉と共にパチンツと魔神は指を鳴らす。するとホールのドアが開き、バレンタイン屋敷の使用人達が室内へと入ってきた。数は数十人。フィリオを除いたほぼ全員である。中には晶の姿もあった。

「も、申し訳ありません、ロゼッタ様……」

本当にすまなそうに彼女は謝ってくる。

「お許し下さい。このような……」

「く、くそお……」

晶だけではなく、全員が申し訳なさとしが入り交じった表情を浮かべていた。中には泣いている者の姿もある。人間界に降臨して以来、常にロゼッタに笑みを向けてきてくれた彼らの無念な姿を見ると、白銀魔神の胸も痛んだ。彼らもフィリオを人質に取られ、動くに動けないのだろう。それがなくても、魔神と人間では実力が違いすぎる。

「私の方こそすまない。本来私がお前達を救わねばならぬのに……。いいか、少しの我慢だ。

すぐにフィリオを救い、お前達も救ってみせる」

この事態に対して責任を持つべきは自分自身だった。いや、責任感とかだけではない。本気で彼らを救いたいと思っている。ロゼッタは全員が安心するような微笑みを本心から浮かべてみせた。

「も、勿体ないお言葉……」

使用人達に畏敬の表情が浮かぶ。

「ふふ、なかなか珍しい光景だね。まさか魔神が人間如きに頭を下げるとは……。一〇〇年前、無慈悲に人間を殺していた君とは思えない姿だ。人間達も君を慕っているように見える。まさにお嬢さま扱いじゃないか……。これは益々余興が栄えるというものだよ」

主従関係に拍手するボロミオン。

「……何をさせる気だ？」

力が回復しておらず、人質を取られている状況では、どんな命令でも聞かざるを得ない。
(ほんの少しの辛抱だ。体力さえ回復すれば……)

人質に危害を与えられる間もなく敵を斬る。たとえ相手がキースの姿をしていようと、再封印することを躊躇^{ためら}いはしない。それまで少し辛抱するだけ——ロゼッタは凜とした意思の炎を胸に灯す。

「なあに……簡単なことさ……。言っただろ？ 君に自分の立場を分からせると。ふふ、つまり——」

耳元にボロミオンは唇を近づけてくると、ボソリッとその命令をロゼッタへと告げた。

「ここでオナニーするんだ。使用人達の前で、淫猥なマスターベーションを見せてくれ」

「な、何をっ!？」

一瞬耳を疑う。反射的に問い返していた。

「何って……そのままの意味だよ。自慰をするんだ。ふふ、したことないワケじゃないだろ？ 君の能力……そして、君の生き方を考えれば……結構慣れていることだと思っただけだね」

魔力の異常増幅がもたらす結果は、魔神であればよく分かる。

（く、屑が……）

自分の行為を悟られているなど、想像するだけでも鳥肌が立つ。

「拒否権はないよ。分かるだろ？」

こちらの感情には間違いなくボロミオンも気付いていることだろう。分かっているからこそ尚、口元を歪めて魔神は笑った。

（く……皆の前で恥を晒せというのか……そ、そのようなこと……）

自分の乱れる姿など、誰にも見せたくはない。しかも、相手は自分を尊崇してくれている人々……。が、拒否権はないというボロミオンの言葉も事実である。フィリオだけではない。この場に集められた使用人全員が、ロゼッタに対する人質と化していた。力だつて戻っていない。

(……機は……必ず巡ってくる……)

ガリッと血が滲みそうな程にロゼッタは唇を噛みながら、射貫くような視線でボロミオンを睨み付けた。

「わ……分かった……」

言葉を絞り出す。

「いい子だ……では始めてくれ。立って……足を広げてやるんだ」

白銀魔神は敵の言葉を受け、ゆっくりと立ち上がった。ダメージが残っている為、その場に立つというだけのこともなかなか辛かったが、ただ立つだけでは終わらない。

(……これは奴に強要されているからなんだ……皆、分かってくれる……必ず)

バレンタインの人間をロゼッタは信じていた。他者を信頼する——キースが教えてくれた大事なこと。一時の恥だつて耐えることができる。

足を左右に大きく開く。

「ろ、ロゼッタ様……」

たとえ聞こえずともボロミオンが何かを命じたことくらいは理解したのだろう。品が無念そうに肩を震わせた。

「これから何をするのか教えるんだ……そうだな、これからオナニーを行うから、全員私を見ろというんだ。大きな声でいうんだぞ」

耳元でボロミオンが囁く。

(……このゴミ虫め……)

八つ裂きにしてやりたい衝動を抱えながら、ロゼッタは僅かに口を開いた。

「……………これから……………わ、私はお、おな……………オナニーをする。だ、だから、皆は私をしつかり見ていてくれ」

羞恥に顔が赤く染まっていく。まるで少女のような反応だった。けれど、真っ直ぐ自分を信じる者達の顔を見つめる。お前達を信頼していると、視線で伝えていた。

「ろ、ロゼッタ様……………お、おやめ下さい!!」

皆の顔に泣き出しそうな表情が浮かぶ。ロゼッタの恥辱を自分のもののように受け止めてくれている顔だった。

「私は大丈夫だ……………。しつかり……………み、見ていてくれ……………」

彼らの気持ちを嬉しいと思いつながら、ロゼッタは白いスカートを自ら捲り上げる。当然股間部を隠すショーツが皆の前に晒された。ムチツとした白い太股も露わとなる。ガーターベルトが艶めかしい純白の下着。呼吸に合わせて下腹部がゆつたりと蠢(うごめ)いている。自然と皆の視線が集まってくるのを感じた。

(問題ない……………この程度、何ということはない)

何度も自分に言い聞かせながら、白銀魔神は自らの秘部へと指を伸ばす。インナーの上から秘裂に触れ、大事な部分を指先でなぞり始めた。シュツシュツとインナーを擦る音を響かせながら、何度も撫で上げる。

「ふうふう……ふうふう……」

最悪な状況。まともに感じる事など不可能だが、異常な状況に息だけは荒さを増す。

「……お茶を濁す程度のオナニーじゃ僕は満足しないよ。分かってるよね？」

（ああ、そうだろうさ……）

この男が見たいのは、使用人達の前で自ら淫らに喘ぐ自分の姿だ。ロゼッタだってそれくらいのことは理解している。

（ならば見せてやる）

一時の恥など気にするに値しない。

右手で陰部をなぞりながら、左手を自分の乳房へと伸ばした。服の上から胸を揉む。掌には収まりきらない柔肉に、指の一本一本が沈み込んでいった。スーッと幾本もの皺が寄る。それと共にピクンツと肉体が震えた。僅かに甘い痺れが全身に走る。何度も何度も乳房を揉みしだいた。

「んっんっんっ……」

陰部を擦る指も速度が増していく。僅かではあるが、自分の秘部が熱く火照り出しているのをロゼッタは指先で感じていた。

「胸は揉むだけでいいのかな？」

「わ、分かってる……くっ……はあはあはあ……」

敵の言葉に応えるように、乳房を揉んでいた指で乳頭を擦り始める。押し込み、転がす

ように指先で胸先に愛撫を繰り返すと、服の中で乳首が勃起し出した。ポチッとボタンのようにスーツの上に浮かび上がる。それを服の上から摘み、シュコシュコと扱くように弄り出した。

「んっ……はぁ……ああぁぁ……」

艶やかさの混じった吐息が漏れ出てしまう。

「分かってるじゃないか。じゃあ次は下だな」

乳頭を弄るたび、電流でも流されているかのように肉体はピクピクッと何度も反応を繰り返した。淫猥な姿。ボロミオンは満足そうに頷くと次の指示を飛ばしてくる。

「大事な部分をみんなにしっかり見せてやるんだよ」

「……あ、ああ……」

一度ギリッと奥歯を噛みながら、ロゼッタは股間を隠すショーツを横にずらそうとした。「それはいけません!!」

晶が悲痛な叫び声を上げる。気持ちは嬉しかったが、彼らの為にもやめるわけにはいかない。

「大丈夫だ。お前達はしっかりそこで見ていてくれ……」

彼らに対して微笑んでみせると、躊躇なくロゼッタは自らの陰部を仲間達の前に晒した。薄い白銀の恥毛に隠された秘裂が、皆の前に露わとなる。何度か指先で弄った為か、僅かに淫肉は左右に開いていた。美しいピンク色の襞が覗き見える。その表面はうっすらと

湿っているように見えた。直接生殖器に感じる空気が冷たい。自身の最も恥ずべき部分を曝け出しているという状況に、心細ささえ覚えてしまう。

「あ、アレが……ロゼッタ様の……」

「なんて綺麗なんだ……」

ゴクリッと何人かの使用人が息を呑む。全員の視線が、ロゼッタの大事な部分へと集中していた。

（覚悟していたことだ。だ、大丈夫だ。問題ない）

他者に見せるのは初めての場所。恥ずかしくないはずがなかったが、膨れ上がる羞恥を無理矢理抑えつけ、白銀魔神は秘部に直接触れた。

くちゅりっ……。

「んんっ……あっ」

ビクンッとロゼッタは肢体を一瞬硬直させる。インナーの上から触れるよりも、明らかに強い愉悅を感じた。思わず声が漏れてしまう。思わず指を離れた。

「どうした？ やる気がないのか？」

「ち、違う！ やる。やってやるさ……んんんんっ……ふあっ……」

慌てて手を陰部に戻す。指先が媚肉に沈む。途端に甘みを含んだ悲鳴が上がってしまう。淫らかな声をバレンタインの人々には聞かせまいと、唇を閉じようとする。

（駄目だ。それでは駄目なんだ……）



口唇を閉じかけた時、ボロミオンの視線を感じた。別に何か命じてきたわけではなかったが、視線が訴えかけてくる。羞恥を隠すことは許さない——と。

「んっあつ！ んはあつ!! あっあつあつ」

抑えることなく嬌声を上げる。くちゅりくちゅりと音を立てながら、何度も何度も秘裂を指で擦り上げていく。指先でヒダヒダを摩り、クリトリスを指先で弄り「あっあつ」と悲鳴を上げながら、ロゼッタは止まることなく自慰を続けた。

（早く……このような屈辱は終わらせる……）

それだけを考え、足を僅かに蟹股状態で開きながら、自らの股間を貪り続けた。

「まるで猿みたいに情けない姿だなあ。思った通りオナニーは初めてじゃなさそうだなあ。ロゼッタ……聞かせてくれよ。一体誰を想像しながらオナニーしてるんだ？」

「……」

「いつも誰を思っただけでオナニーしてるんだ？」

ロゼッタをボロミオンが嘲笑う。

「……き、キースだ……」

「へえ……なるほどね……僕を想像していたワケだ……」

ニタリッとキースの顔が笑った。

（き、貴様じゃない！ 貴様はキースじゃないっ!!）

ボロミオンの言葉は許し難い。キースの似姿をしているというだけでも、ロゼッタにと

つては憎悪の対象だというのに、自分をキースと同一視するなど、受け入れられる言葉ではなかった。

「くっ……んっんっんっ……」

敵の言葉など聞こえない。ロゼッタは忘れるように自慰に没頭する。秘裂を撫でるだけでなく、肉穴に指先を差し込み、出し入れを繰り返す。

（早くイケ！ イクんだ!!）

達しさえすればこの状況から脱することができる。情けない思考を持ちながらも、ロゼッタは自分自身を慰め続けた。

じゅくつ、ぐちゅぐつ、ちゅぐつちゅぐつちゅぐつ……。

分泌される愛液の水音が室内に響き渡り始める。

「す、凄い……」

「ロゼッタ様のアソコ……あ、あんなに……」

中指で肉穴を掻き出すたび、愛液が周囲に飛び散る光景をバレンタインの人々が呆然と見つめてくる。

（見るな。み、見ないでくれ……）

その視線が何よりも辛い。肌に突き刺さるような痛みさえ覚えた。その為なのだろうか？ 激しく自慰をしても、一向に達することができない。彼らに見られていると考えるだけで、どうしても最後まで快楽を受け入れることができなかった。

熱気が肌に直接伝わってくる。グニユリツとペニスが柔肉を押し込んだ。ドクンドクンツという肉棒の脈動までは伝わってくる。

「おふふ、最高だあ。流石ロゼッタ様。じ、じゃあいきますよ。むほほ」

乳房を摩擦するように腰を振り始めた。肉棒によって胸の形が変えられていく。数度腰を振るだけで、肉先からは半透明の液体が溢れ出す。

「んっんっんっ。き、気持ちいいのか？ こ、こんなことが……」

じゅっじゅっじゅっじゅっ……。

谷間が先走り汁で汚されていく。胸の間からニユルンツと亀頭が顔を出した。

「口でも奉仕するのを忘れないで下さい」

「……う……んちゅっ……くふっ、んっんっんん。ふも、く、くしゃい……」

晶の指示に従い、先端部に口付けをする。今度の肉棒は恥垢がそれ程溜まっているというわけでもないのに、異様に臭かった。腐臭に眉を顰めながら、ちゅぽちゅぽと唇で亀頭を吸う。

「うあ、た、たまりません。ふほほ、もっと、もっととお！」

興奮した男が更に腰を振る速度を上げる。

ぶじゅぐんぶじゅぐんぶじゅぐんっ！

「んぼっ！ む、ふぶえっ！ おっおっ、むひんっ！ あっあっあっ!! さ、さきつは、

先はやめ——んひああっ!!」

いや、ピストンだけでは終わらない。男は腕を伸ばすと、指先で乳首を摘んできた。肉体発情の為、勃起した乳頭が指で転がされ、引っ張られる。走る性感。魔神の口から甘い悲鳴が上がった。

「お、おかはれてりゅ。む、胸を——くっんっ！ おかはれて……あ、か、らくなつらあ。んちゅうう……あ、ちゆくへ、や、やけろしゆる！ おっぱいひやけろしゆるう!!」
ピストンのたびに熱氣を増していく肉棒。乳房を犯されているかのようにだった。硬度と熱氣が増していく。

「さっきまで散々溜めてましたからね。も、もう射精そうだっ！ ふひいつ！ い、イキますよ。ロゼッタ様の胸を孕ませてやりますよ！」

言葉と共に巨棒が柔肉に埋もれる。ビクンビクンッと巨棒は痙攣し、乳房の谷間に濃厚牡汁を撃ち放った。

「んあっ！ で、でへるっ!! ありゅいのが、わ、わらひのむれのなられ——んぶっ！ぶぶうっ!!」

胸に収まりきらない汁が、谷間から噴き出す。勢いよく飛び散る白濁液が、魔神の顔をぐしょぐしょに汚した。

「うあ、うああ……んごきゅっんごきゅう……ふはああ……き、汚い……臭い……」

頬を精液が垂れ流れていく。その顔はまるでパックでもしているかのように汚れていた。「まだまだ終わりませんよ……」

にたりと笑う男達。口腔奉仕は続く。

「く、に、二本か……んぼつ、ご——むごつ、んぽおお」

口腔に肉棒を迎え入れる。ただし、今回は一本ではない。二本のペニスを同時に白銀魔神は咥えた。二本差しフェラチオ——普通に考えればあまりに異常すぎる行動だったが、更に白濁液を飲まされたロゼッタには、判断が付かなくなっていた。

ごぶじゅつ、ぶごつ、じゅぶごおつ！

「むぼつ！ お、おぶぽおつ！ ぞ、ざげつる、ぐ、ぐぢびる、ざげるうつ!!」

限界まで口唇を開く。内側から肉棒によって頬が膨らんだ。美しい顔が苦痛に歪む。ボタボタと垂れ流れ続ける唾液。

（や、やるんだ。やらないと……これが終わらせないと……）

止まることは許されない。

「最高ですロゼッタ様」

「もつと、もつと奥まで咥えて下さい」

あまりに無様で痛々しい姿だったが、男達は容赦してくれなかった。更なる行為を要求してくる。それどころか、腰さえも振り始めた。二本のペニスが交互に魔神の口腔を襲う。

「ほごつ、ほごつ、ぽごおつ!! んぷはつ……んふ……んちゅうう！」

ロゼッタの苦しみに対する斟酌しんしやくなど存在しない。誇り高き魔神は男達のオナホールと化していた。何度も何度も喉奥を叩かれる。

「ふがつふがつふがあ……。んちゆるう……。ちゅぷ、くちゅくちゅ、んふうう……。んごつ、んぶう!!」

呼吸ができない。瞳の焦点がずれた。口から唾液、鼻から白濁液を流しながら、されがままの性欲処理道具となる。

（お、おつき、おつきぐなつでる……。く、口の中で……。ち、ちんぽが大きく……）

射精に向かって膨張していくペニス。半分意識が飛んだようになってるロゼッタは、まるで他人事のようにそれを受け止めていた。

「凄すぎますロゼッタ様。ま、まさか貴女がこんなに変態だったなんて」

「幻滅です。もしかして、あのうんこもわざとだったんじゃないですか？」
笑う男達。

「ち、ちがつふ。そ、そんなことなつい……。ぶつ、ふぼつ、ぼおつ」

ジュブゴツと言葉の間でも肉棒が突き込まれる。言葉を遮られたロゼッタの瞳が無様に見開かれた。これを見てゲラゲラ男達が笑う。

「そんなことないとか否定しても、全然説得力ありませんよ。ロゼッタ様……。変態は変態らしいところを見せて下さい。ほら、こっちに向かってpeesでもして下さいよ」

晶も笑っていた。笑いながらレンズを向けてくる。誇り高き魔神に下されるには、あまりに酷い命令だった。

（でも……。や、やるしかない。私はやるしかないんだ……）

抵抗はできない。二本の肉棒を同時に咥えながら、白銀魔神は自ら両手を上げ、ピースサインを作った。

「う、わ、わだっひは、ち、ちんぼじゅきの、へ、へんだい女れずう……むぼつ、うぶもおっ……」

必死に言葉を絞り出す。

「う、え、エロすぎる」

「ほらほら、もつと笑顔でお願いしますよ笑顔で」

向けられるカメラ。

「んふっ、んへへへ、ちゅぼつ、ぶちゅるうう……ぴ、ぴーしゅ、ぴーしゅう」

レンズに向けて肉棒を咥えたまま笑顔を浮かべる。

「変態すぎだろ！ が、我慢なんかできねえ!!」

この姿に男達は一瞬で限界へと上り詰めた。二本の肉亀頭が膨張し、痙攣し——、ぶびゅぼつ！ どびゅびゅ、ぶびゅばあああああああつ!!

「——!! にゃがつれ、こんれくつるう！ げぼつげぼお……あちゅいのたくしやむう。んじゅず、じゅぶるるう」

同時に白濁液を撃ち放った。どちらのペニスもこれまでの男達以上の射精量。ビクンビクンと痙攣しながら、口腔に白濁液を止めどなく流し込んでくる。

（お、溺れる！ せ、せーえきで、汚い汁で溺れるうっ!!）



同情し、救いの手を差し伸べてくれる者は何処にもいなかった。

*

「分かってますよねロゼッタ様？」

「俺達全員を満足させて下さいよ」

バレンタイン邸での陵辱の一夜が明けても、ロゼッタに安息の時間が与えられることはなかった。この日も晶によってキャンパスへと連れてこられたロゼッタを昨日のサークル員達が囲む。場所はやはり視聴覚室。知人も連れて来たらしく、今回は人数も増えていた。囲まれる魔神の身を包むのは、黒いボンデージスーツ。昂った魔力により、再び白銀魔神の肉体は変貌してしまっていた。

「だ……誰がそんなこと……」

当然拒絶するロゼッタだが――、

「逆らうことなんかできませんよ。俺達にはこれがあるんですから」

拒絶は許されない。視聴覚室のモニターには、前日の奉仕風景が映し出された。

「す、すげえ……ま、マジかよ。ロゼッタ様が……え、エロすぎだろ……」

この光景を初めて見る学生達が感嘆の声を上げる。

「そ、そんなものを見せるなあっ!!」

自分の痴態を誰かに、自分自身に見せつけられる。耐え難い行為だった。慌ててモニターの前に立つ。

「分かりますよね？ 俺達に逆らうってことはつまり……」

キャンパス中の人間がこの映像を見ている姿が思い浮かんだ。無様で淫らすぎる映像を見たら、自分を慕ってくれていた皆が、屋敷の人々と同じような視線を向けてくるかもしれない。想像するだけで身が引き裂かれそうだった。

「……今日は本番もやらせていただきますよ。おあつらえ向きに、あの時のエロイ服ですしね。楽しんでなあ」

「……………」

無言のまま頷くことしか、ロゼッタにはできなかった。

*

「おらっ！ お前は馬だ！ 牝馬らしく、しっかりと走れよおっ!!」

「ひぎっひぎいっ!!」

両足を持ち上げられ、腕だけで身体を支えるという状況でロゼッタは背後から犯されていた。バシンバシンッと何度も腰が打ち付けられる。そのたびに自然とロゼッタの肉体は前に進むような形になった。黒いボンデージから覗き見える乳房が大きく揺れる。胸の谷間を汗が流れ落ちていった。

「やっら、こんなの、やめ——むひっつむひい！ た、たおれつる、さ、ささえきれない！ お、おね、お願いだからや、やめつてえ!!」

腔奥を肉棒で叩かれるたびに、全身から力が抜けていく。身体を支えるのもやっとな状

況だった。思わず弱音が口から漏れてしまいが、聞き届けてくれる者など何処にもいない。

「うるせーよ！ 馬が喋るな！」

「いやいや……あまり酷いことをいうなよ。ちよつと彼女を酷使しすぎだぞ。ほら、水分補給くらいさせてやるんだ？」

「はひっはひっはひ……す、水分補給？」

男達の言葉が遠くに聞こえた。彼らの言葉が理解できず、首を傾げる。

これに應えるように男が肉亀頭をロゼッタの顔へと向け――、

じよぼっ、じよろろろおっ!!

「んぶえっ！ ぶふっ！ んぶぶぶうっ!!」

唐突に排尿を始めた。黄金水が容赦なく黒衣の白銀魔神を叩く。

「うべあっ！ き、きたなっ！ や、やめっ――ひっひっひんっ!! 汚い。汚い」

黒い衣装に汚水が染み込んだ。勃起した乳首が衣装の上からでもはつきりと透ける。

嫌悪感に身が震えた。哀れな魔神の姿――それでも男達は容赦しない。躊躇いなく白銀

魔神を更に犯してきた。

「むひょおお！ お、おっく、奥がつかれてっるうっ！ ひっひっひんんっ♥ び、ビ

クビクしてる。チンポが、わ、私の中でチンポがびくびくしてっる!!」

「おら、射精すぞ！ たっぷり受け取れ!!」

ばじゅんっばじゅんっばじゅんっ！

穢され、悶えるロゼッタに容赦なく腰が打ち付けられる。痙攣するペニスが膣壁まで震わせる。

「だつめ、い、いま、射精されたつら——あつあつあつ！ く、くつる！ きちやうう♥」
バチツと電流が走った。意識が一瞬飛び——。

ぶびゅぽつ！ どびゅつ！ ぶびゅぽつ！！ どつびゅどつびゅどつびゅるるうつ！！

「あ、熱いのながれつてきたあああつ♥ あーあーあーあーあーっ！！ いっぐ、わたし、私イッちゃうのお♥」

絶頂を我慢することなどできない。魔界王女は狂ったように愉悅の悲鳴を上げた。

（は、はいつてる……に、人間の精液で、わ、私のお腹がたふたふになつてる……。あ、熱い。身体中が熱い……）

射精を受け、達した肉体だったが、まるで性欲は衰えることを知らない。いや、寧ろよ
り昂り出していた。全身が火傷でもしそうな程に発熱している。自然と視線は快楽を求め、
男達の股間部へと向けられた。

（凄、い、あ、あんなに勃つてる……）

ゴクリと喉を鳴らす。キュンキュンと子宮が疼いた。

「ん？ もしかしてやりたいんですか？」

「そんなことは……」

否定しつつもペニスから視線を逸らせない。

「いいんですよロゼッタ様。ここは正直になって下さい。ほら、これは脅迫です。ここで素直にならないと、学校中に貴女の痴態がばれてしまうんですよ」

それは駄目だ。自分の陵辱場面を皆に見られるなど、想像もしたくない。

(だから、仕方がない。仕方がない……仕方ない仕方ない仕方ない)

頭の中が一つの言葉に占められていく。

「ほら、じゃあここに跨^{またが}って下さい」

床に横になる男——勃起ペニスが天井を向く。拒絶などできなかった。

「ふ、ふぐあっ……んっんっんっんっんん」

魔界王女は床に寝転がった男に近づいていき、ペニスに手を添えると、自ら膣中へと肉棒を導き入れていった。

ずじゅっ、ぐじゅるるるう。

「ふっひ、は、挿入つくつく……はああああ♥」

うっとり歪む表情。下腹部に広がる巨棒の感覚が心地いい。

「ふうっふうっふんんんん！ ふあっあっあっあっ♥」

自分でも気付かぬうちに、腰を動かし始めてしまう。

じゅごっじゅごっじゅごっ！

(何を……わ、私は何をしているんだ？ あ、当たるっ！ 奥までペニスが届くっ)

自分自身の行っている行為すら理解できなくなってくる。それでも続けなければならな

い。クネクネと腰を振り、膣壁でペニスを締め上げた。

「お、俺はこっちの穴を頂くぞ」

ロゼッタの背後に男が立ち、尻孔に肉棒を擦りつけてくる。

「ちょ——い、今は、は、挿入って」

あり得ない事態だった。膣中に肉棒が挿入されているというのに、更に尻まで犯される。想像すらしていなかった。

「知るかそんなもんっ」

男の行動を止めようとするが、陵辱者は止まらない。ロゼッタの言葉などあつさり無視し、直腸へと肉棒をねじ込んできた。

「ほ、ほっご、むほおとおおっ!! つ、つぶれる!! わ、わたひの身体が潰れるうっ!! こ、こすれつてるんだ! な、中で、ペ、ペニス同士が擦れてるっ!! ほおっほおっ! は、挿入らない! それ以上は挿入らないっ!!」

腫が見開かれる。キュウツと背中を反り返らせ、身体を支える両手を震わせた。が、男は止まらない。

「たまんねえな。すげえ締め付けだ」

「こ、こんなのすぐに射精ちまうぜ」

などといいながら、根元まで恥肉の海に沈めてきた。

「む、むっほ、むほおとおっ♥ おっく、おぐまできで——むひよおっ!! う、うご、う

ごかしゆなっ！ うごかしゆなあ!!」

勿論挿入だけでは終わらない。すぐさまピストン運動が始まる。二本のペニスが交互に引き抜かれ、打ち込まれた。

「おっおっおっおっ！ こ、こわれっる！ す、すご、すごっすぎるっ!! ふひっふひっつ！ だつめ、すぐきっちゃう♥ ありえないのつに、犯されてかんじるはず、な、なんか——はひーはひーはひー、ないのつに、い、いいっ！ 何でこんなにいいのお♥」

常に肉奥をペニスが叩く。際限なく快楽が増幅した。二本の肉棒を胎内に感じながら、ロゼッタ自身へコヘコと腰を振ってしまふ。

「が、我慢できない。ぼ、僕はこの口をもらうぞ」

美しい女が晒す尋常でない痴態。この光景を見て我慢できる男など存在しない。男子学生の一人在、晒した勃起ペニスをロゼッタの口腔へと押し込んできた。

「もごっ、ほごっ、むほごおお……」

根元まで呑み込まされるイラマチオに、自然と魔神はペニスに舌を絡めてしまふ。

（あ、お、おいひい……べ、ぺにしゅおいひい……）

まともな思考をすることなどできなかった。肉棒の味をとて甘美なものだと受け止め、白銀魔神はそれを美味しく味わっていく。

ぶじゅぼっ、じゅぼっじゅぼっじゅぼっ！

「ひゅひぼっ、もぼっ！ おっ、ほおおおお♥」

自ら必死に首を前後に振った。

「お、俺達もだ！」

手にも肉棒が握らされる。自然とロゼッタは手淫を始めた。まわりには自慰をする男の姿も。膣^すえた発情臭が広がっていく。

（ああ、い、いい匂いだ……凄く……いい匂い……）

魔神は止まることもできない。あんなに嫌だったはずなのに、気付けばこの状況に溺れていた。

じゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽっ！

「むふっ、ふむーふむーふむー♥んあっ、こ、こっちも……んむえええ」

数本の肉棒を代わる代わる咥えていく。手淫しながらの口奉仕。手が使えない分、より激しく頭を前後に振った。唇が突き出され、タコのように情けない顔を晒してしまうことも、唇を外側に捲り返してしまうことも厭わない。氣にする余裕がない。

「ふじゅっ、はあっはあっはあっ、て、手もべとべとらあ……んじゅっ、ちゅっちゅっちゅっちゅっ」

肉棒を抜く手も、溢れ出す先走り汁でぐしょぐしょだった。肉茎を一度抜くだけで、ぐちよぐちよと湿った音が響き渡る。

「凄すぎる。なんて締め付けた。チンポが取られちまいそうだよ」

蜜壺の締め上げも激しさを増していく。溢れ出した愛液は止まらない。尻の穴も窄まり、

ペニスから子種を搾り取ろうとしていた。

「あーあーあーあー、い、いいっ！ いいのっ♥ き、気持ちいいのお♥ ロゼッタ、だつめ、もう駄目なの。良すぎてもうロゼッタらめらのお♥」

淫らなダンスを踊るように、白銀魔神は下腹部をくねらせる。快樂だけが魔神剣士の肉体を支配していた。

「い、射精^いきますよロゼッタ様」

「たっぷり僕らのセーシを楽しんで下さいね」

震え始める数十本の肉棒達。

「あ、んぶえっ、ほひっ……ああ、だ、射精してっ♥ せ、セーシいっぱい、むほっむほっむほっ、わ、わだひに、ろ、ろじえったにかけでえええ♥」

無意識のうちに射精を求める言葉まで吐いてしまう。

「う、で、射精るっ!!」

これに男達はすぐに応えた。

膨れ上がる数十本の肉棒。

「わっかる。あっあむっ、ふぐーふぐーふぎゅー！ 分かるのお♥ なつかの、チンポの形がわかりゆのお♥ きおもぢいい♥ んじゅっ、んじゅずずうっ♥ あつく、なってる。やけろしちゃう。ろじえったやけろしちゃう♥ くっる、気持ちいいのがくっるの♥ あっあっあっあっあああ♥」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／本体690円(税込)



全国書店で
好評
発売中

平凡な少年が女体化!
鬼に狙われた
従姉妹を護れ!!

目覚めると従姉妹を護る美少女剣士に
なっていた

〔小説：狩野景／挿絵：天鬼ごうり〕



全国書店で
好評
発売中

男の子と女の子——
二つの性の間で揺れ動く
男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!

オトミコ! 僕は男の巫女娘

〔小説：大熊狸書／挿絵：大空樹〕

思春期なアダム
アウトサイド・ドア
爪説：さかき傘／挿絵：天海雪広



全国書店で
好評
発売中

真夏のキャンプ場で勃発する
天使VS魔族VS人間の
三つどもえバトル!

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙魔学園戦姫ノブナガ!! ①～③
- ピルグリムメイデン ①～③
- 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです

- 思春期なアダム ①～④
- 呪詛喰らい師【カースイーター】 ①～②
- 女幹部メル様のセカイ征服計画!
- 借金お嬢クリス ①～④
- 無敵の姫騎士がDMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

© KTC - KILL TIME COMMUNICATION

検索 戻る 進む 中止 更新 ホーム 自動入力 プリント メール

アドレス: http://ktcom.jp/

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

http://ktcom.jp

二次元ドリームノベルズ
二次元ドリーム文庫
二次元ドリームマガジン

会社概要 資料請求 ご利用方法 通販問合せ

国内最大級のダウンロードショップ! ゲームのダウンロード販売はこちらからどうぞ!

DLsite.com

国内最大級のダウンロードショップ! ゲームのダウンロード販売はこちらからどうぞ!

DLsite.com

会社概要 資料請求 ご利用方法 通販問合せ

買い物かご 現在の合計: 0円

更新

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

5/31日 09:11

ヴァルキリエ
VALKYRIE



<http://www.comic-alkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンライン漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

cranberry
STRAWBERRY



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!